

島守

中勘助

青空文庫

これは芙蓉ふようの花の形をしてるといふ湖のそのひとつの花びらのなかにある住む人もない小島である。この山国の湖には夏がすぎたからはほとんど日として嵐の吹かぬことがない。そうしてすこしの遮さへぎるものもない島はそのうえに鬱うつそう蒼そうと生い繁った大木、それらの根に培つちかうべく湖のなかに蟠わたかまつたこの島さえがよくも根こぎにされないと思うほど無惨に風にもまれる。ただ思うさま吹きつくした南風が北にかわる境さかいめに崖を駈けおりて水を汲んでくほどのあいだそれまでの騒さわがしさにひきかえて落葉松からまつのしんを囓きくむ蠹いむしの音もきこえるばかり静しずかな無風の状態がつづく。

この島守の無事であることを湖の彼方かなたの人びとにつげるものはおりおり食物を運んでくれる「本陣」のほかには毎夜ともす燈明の光と風の誘ってゆく歌の声ばかりである。この人は昔村が街道筋にあたって繁昌した頃の御本陣のあととりだが、時勢の変遷たひや度かさなる村の災厄のため落魄して今はここでも小さいほうの数に入る一軒の家のあるじにすぎないけれど通り名だけはもとのまま「本陣」と呼ばれている。本陣は村じゅうでいちばん人がいいといわれるとおりにおそらく国じゅうでも最も善良な人のひとりであろう。その善良ほくちよく朴直のゆえに私は心からこの人を愛する。性来、特に現在はなは甚だ人間嫌いになった私に

とつてもこの人が島へくることは一尾の鱒ますが遊びおよできたような喜びを与える。——追記。
その後いちど逢つてしみじみ昔話でもしたいと思いつつおりを得ずに幾十年かたつうちに本陣は亡くなつた。残念なことをした。家も新築されてあとが栄えてると人づてにきいて喜んでたのだつたが。

たまさかに参詣の旅人をのせてくる村の人は芝しば蝦えびや烏からすがい貝いといつしよにこの寒村のつまらぬ名物のひとつとして私の話をするのであろう。彼らは影法師のうつるのも忘れてそつと障子の孔あなから覗のぞいたり、または森のなかを歩いてるところを見つけて変化へんげものもの正体でも見あらわすようにじろじろと見まわしたりする。多くの者は私の不興げな顔を見て目くばせをし囁ささやきあつてそこそこに帰つてゆくが、なかには好奇心にかられ煙草たばこの火をかり宮の名をたずねなどするのにかこつけておすおす話しかけるのもある。彼らの問いは鼠ねずみの道のようにきまつている。こんな島のなかにいてなにをするのか、寂しくはないか、恐しくはないか……これらの問いに対して私はなんと答えたらよいであろうか。住むべき家もないゆえ鴨かものように迷つてきてこの島に宿をもとめたのである。寂しいといえれば都会の喧噪のうちですこしの理解もない人びとの群にまじつてるよりも寂しいことがあるか。ここは湖の離れ島である。さりながら日月は追ひあう水島のごとくにして朝夕に島を照し

て忘れることはない。私はこれらの木や、鳥や、虫や、魚やと友となり、兄弟となつて美しい姉妹の神を送り迎えている。私は今ひとりになつて世のさかしらな人びとに愚かな己おのれの姿を見る苦しみからのがれ、またいかに人間はつまらぬ交渉をつづけんがために無益にわずら煩わされてるかを知つた。世のあさましいことは見つくしまたしつくした。今はただ暫ししばなりとも清浄な安息を得たいと思う。旅人よ、私はおんみらがかしましいだみ声をもつてこの寂寞せきぼくを破ることをおそれるばかりである。

島にひとりいれば心ゆくばかり静かである。読書と冥想のひまにはわが穴を嗅ぎまわる獣のように島のうちをさまよ遣いあるく。その芙蓉の花の花びらに虻のとまったほどのこの島にも雨につけ風につけなにかの新しいことがないでもない。栗の枝が吹き折られたこと、鳥がしが蜺しみの殻からを落していったこと……それらは島の歴史に残るべき大きな出来事である。またおりふし夢野の神はしのびやかにひやきて冷かな私の眠りをいろいろの絵筆に彩つてゆく。それらのことを私は日にちこまごまと日記につけておく。これはこの島に隠れてしまもり島守の織まんだらる曼陀羅である。

明治四十四年九月二十三日

篋みのがさ笠をつけた本陣に船頭をたのんでひどい吹きぶりのなかを島へわたった。これから私の住居となる家は年に一度の祭礼に遠方からくる神官の泊るために建てたもので、羽目はめ板いたはところどころずり落ち雨戸もまだついていないゆえほんの雨つゆのしのぎになるばかり、夏が過ぎればすぐ冬になるならいの山国の湖のなかにただひとつ浮いて出たようなこの島をめがけて周囲の山やまからおしよせてくる寒さをこの都人に防いでくれるほどの用にも立たない。積んである畳を幾枚か家のなかほどにしいて座敷とし、かたかたの床には白木造りの神輿みこし、かたかたには炊事の道具をならべ、畳の黴かびをふき、あたりの塵ちりを払つてみれば思ったより住みごこちのいい住居になった。梁はりのうえには笠鉾かさぼこ、万燈。枝と縄と藁で面白い粗野な織物になつてゐる屋根裏からは太鼓、提ちようちん灯などがぶらさがっている。本陣はそこから板屑を拾つてきて焚きつけをこしらえ、米はこのくらいに、水はこれくらいに、火はこうしてと懇ねんごろに教えながら昼飯の支度をして、やがて飯ができたのでちよこなんと畏かしこまつて給仕をしてくれる。それから南の浜へおりて器を洗うなどひととおり用事をすませたのち

「ごはんが残つたらおじやにしておあがりなさい」

といつて帰つていった。あとに残つて私はこれはいよいよ独りになったと思つた。

二十四日

安養寺あんようじさんへ御挨拶にゆくために島を出る。——註。島へ移るまで私は湖畔の安養寺

さんの離れに御厄介になつていた。——池田さんの炬ばたで話してるところへ福岡の妹がきしく危篤という電報がきた。池田さんの人たちが気にかけてきいたけれど私は笑つて なんてありません と平気でいた。

島へ帰る。昼飯の支度をするのもものう懶い。ぼんやり寐ころんでいる。ふと ああよく体を大事にしてといった と思ひ出して力なく焜炉こんろに火をおこしはじめた。飯をかける。焜炉のまえに坐つて煮える音をきくともなくきいてるうちにはらはらと涙がこぼれかかった。よくひとりで世話をしてくれた。——註。妹が嫁にゆくまえは小石川の家で母と私と妹の三人ぐらしだった。——裁縫がすきでいつも針をもつていた。日に何遍もココアをいれさせるとなさけなさそうな顔をしてやつてくれた。瀕死の床に寐てる姿が眼にうかぶ。飯がふきこぼれるのでおろして菜の鍋をかける。木蓋のうえで葱ねぎをきつて一つ一つ石を投げるように投げ込む。涙がはらはらとこぼれかかる。こんなに涙が出るのはもう死んだのではないかと思う。死ぬときどんなにか皆にあいたかつたらうと思う。焚きつけがなくなつた。

晩飯のために拾わねばならぬ。

後ろの森の杉の枯葉をひろう。ひとつずつ拾って左手にためる。涙がでる。かけすぐらいの鳥がゲーゲーと争っている。

なにをするともなく夕がたになった。きようは夜になるのが寂しい。その夜の闇のなかにひとつぶの昼の光をとめておくような気もちで島の脊^せを燈明をともしにゆく。落葉の音や木立ちにひびく自分の足音をききながら石段をおり燈明をともしてなにということもなく眺めている。燈明の影が水にうつる。その水底に幾年となく落ちかきなつた枝、そのうえを小さな魚の子のゆくのが透いてみえる。彼らはまことに天から生みおとされたかのよう^{とこころ}に処^{ところ}を得がおである。きようは曇。飯^{いづな}綱にも黒^{くろ}姫^{ひめ}にも炭焼の煙がたつ。煙が裾^{すそ}曳^ひくのは山^{やま}風^{まわし}であろう。

二十五日

朝目をさますと同時に妹を思った。きようの悲しい最初の思いである。□□子はまだ生きてるような気がする。そして私のように今日がさめたのだらうと思う。

雨まじりの風が烈しく吹いて島は終日波の音と木の葉の音に鳴りつづけていた。島には

木の葉が雨のようにふる。彼らは朝から日のくれるまで、日のくれから夜の明けるまで、ながいあいだ住みなれた梢こすえに別れをつけてわるびれもせず土に帰ってゆく。そうして地に落ちてからも暫しばらくは若わかしい心を失わずにあちこちと追ひあいさぎめきあつている。□
 □子はまだこのあいだ 来春は子供を抱いて上京する といってよこした。私は 楽しみに待つ といつてやった。□□子は生きて約束どおり来春出てこなければならぬ。兄弟のなかでただひとりの可愛い妹だったものを。

雨のなかを提灯をさげて燈明をあげにゆく。燈明が高いので水ぎわの石にのつてもまだいっぱいに手をのびさねばならぬ。風のまをみてもしてもともしても扉をささぬうちに消えてしまう。あきらめて帰つたがなにか気がすまないのでまた性懲りもなくともしにゆく。

燈明の下に立つ。風がますます荒れて波がおりおり裾を洗う。いらだつて風なぐまも待たずともしはじめたが今度は三度めについた。石からおりて裾をしばらくはかない喜びにみちてちらめく影を見あげながら 湖の彼方にこの光を望む村の人たちは島守がきょうの一日の無事であったことを知らせるための燈火とばかり眺めるであろう と思う。

二十六日

朝。晴。きのう拾った杉の葉で火をおこしてるところへ本陣が鉦なたのこぎりと鋸のこぎりに豆板、頼んでおいた鰹かつおぶし節と池田さんからことづかった香煎こうせんをもつてきて餅は焼いてばかりたべずに雑煮にするがいい といつて大きなひね茄子なすを二つ袂たもとから出した。両手にあまるほど肥えて石みたいに堅い。また麴こうじが少いからまずかうけれど と小さな瓶から味噌をくれた。そして俎まないたがわりに拾ってきた板のうえへ鉦なたで鰹節をかいてくれたが私は雑煮は今度のことにして餅を焼いてたべる。かようにしてこの侘わび住居には不相応な珍味のかずかずがそなわった。無性者の料理人は手軽をのみ心がけてなるべく材料を使わない。米も持つてきたなり袋さくに一杯、砂糖もそのまま、山田から送つてくれた浪華漬なわづけもまだあけない。玉子もたまご笹さに十ほど、葱が一本、はぜもろこしも残っている。今やこのソロモンの富を得た島守はこれらのものをどういう順序に腹のなかへしまい込もうかについてすくなからず苦勞をする。本陣は焚きつけをつくりおえて煙草をすいながら味噌汁のかげんやなにか教えていった。

いつからかこの神輿みこしのなかに夫婦者の鼠ねずみが住んでいる。彼らは私ごとき人間に平和な生活くわんを邪魔されるのを腹立つかのように毎晩言語道断に荒れまわるのでゆうべから一きれの

餅をいくつかに割って床のうえにほうっておくことにした。お供物のおかげで一晩静かだったが見れば餅はきれいに運び去られている。

二十七日

□□子の具合がいいという知らせがきてきのうは幸福な日だった。けさ南の浜へおりてたらいつのまにかきた本陣が

「先生 先生」

とよんだ。私が二足三足坂をあがりかけたら

「はがきがまいました。たいそういいつてんです」

といった。本陣はこのごろ私が気分がすぐれないのを気にかけてくるたんびに親切にたずねてくれる。また私が□□子のために心を痛めてるのにも深く同情してるのだ。

夕。棧橋に立つてるとき北の岡の峽はざまから霧が吹き出してきたので今に島を包むかと思つて眺めてたが徐ゆるかに湖をわたり東の山にそうていってしまった。秋になって霧が急にすくなくなつた。燈明をつけてもどつてみればもう鼠の音がしている。ゆうべは餅のかわりに一掴つかみの米を供えておいたら床につくまもなくばちばちと内証らしくたべる音がした。今

夜ははぜもろこしをささげよう。

にわか
俄に雨の音。

二十八日

夜半。恐しい風の音に呼びさまされた。いま人びとはみな眠って私ひとり覚めてるのであろう。私はこの島の嵐のなかにただひとりなることを思い幸さいわいにみちて眠りに入った。

二十九日

朝。散りしいた木の葉にまじつて翅はねのはえたいたやの種子が落ちていた。山やまがありつたけの風を吹きつくしたかのようにけさは静かである。檜かしどり鳥や、木つつきや、鳥じゅうを木づたい鳴きかわす鳥のなかでひよどりの声がよくこだまひびく。なに鳥か大杉の梢で玉の梭ひを投げるように鳴く。湖水にうつる雲の影はしずかにうごき、雑魚ざこの群は吹きかわった新鮮の気を吸うように滑なめらかな水面に泡をたてる。

机にもたれたまま夕がたまでとうとした。そのあいだにいろいろな鳥の声がかきこえた。目をさましたら手が痺しびれてなにを持つても乳のみ子のように落してしまう。

島守の一日の暮しぶりはこうである。朝目がさめるとながいあいだの習慣にしたがつて
 睡後のけだるさが心臓から指の先まですっかりきえてしまうまでは静しずかに床のなかに仰臥し
 ている。漸ようやく五体が自分のものになれば起きて南の浜へ顔を洗いにゆく。雨の日やあまり
 寒い朝は前日に汲んでおく水で用をすまず。次には土間の蓄えのうちから一掴みの杉の枯
 葉とやや生のとを拾い五、六本の木屑をそえて焜炉に火をおこす。生の葉は燃えるときに
 濃い白い煙をたてるのと、ぱちぱちはぜるのがよくてことさらにませるのである。また一
 本のマツチのほかに藁の帯をした束から一枚のつけ木をぬきだしてそのさつとひいた硫黄
 の色、泡だちながら燃える紫の焰、つんと鼻をつく強いかおりのためにその一枚を無駄に
 つかう。燃えたつ火のなかへ三つ四つ手づかみに投げこむ炭のおこるころには杉の葉は灰
 に、木屑はほどよくおきになってそのうえに土瓶かびがのせられる。掃除をして餅の黴かびをけず
 り、玉子や茶道具をそばにならべ、小皿に醬しょうゆ油をうつすじぶんにはちようど湯がわく。
 そこで火箸ひばしを火のうえにわたして餅をのせ、その焼けあんばいによって焜炉の扉のかげん
 をするのをひとりで興がりながら端から醬油をつけてたべる。それから玉子をのみ、豆板
 をたべ、茶をすすって朝の食事をおえ、ひと休みののち食器をかたづけらるまで火をたきつ
 けてから約一時間半を費す。一晩のうちになつた胃のなかへ甘い、鹹しおからい、渋い食物

を充分につめこんだ満足はたとえようもない。小憩ののち読書、もしくは日記。時間と手数のために昼飯をはぶき、もし暖かならば南の浜へおりて体をふく。膝ぶしぐらいまで水にはいり、摩擦によつて充血した皮膚を日光にあてまた微風に冷しながら四方の山を眺める気もちはまことに爽快である。もし濯ぐべき衣類食器などあればついでに洗う。帰つて心臓の鼓動のしずまるのをまつて読書、要すれば午睡。三時半夕食の用意にかかる。これは二食なのと、暮れるまでにゆつくり散歩の時間を得たいためである。大体の順序は朝におなじ。但し夕食は雑煮なので餅の黴をおとしてからおなじ庖丁で鰹節をかき、茄子の皮をむいて銀杏いちようにきり、つゆのかげんをして鍋をかけねばならぬ。しずかに休んでから手ばやく食器をかたづけ、火をけして鳥居へゆく。そうしてそこからお宮までのあいだの長い路を落葉をひろつたり、歌をうたつたり、木の根をまたいだり、石段をあがつたりおりたりして火ともしごろまで歩いてゐる。

夕。鳥居へおりていったら棧橋のうえに鶴せきれいが一羽いた。そつとしゃがんで見てるうちじきにこちらを見つければ、となきながら小島が崎の葦のなかへ、そこには二、三羽の友だちがいておなじように鳴きつれて斑尾まだらおの道のほうへ飛んでいった。

汀みぎわにひとふさの木の実がおちていた。枝わかれした淡紅の莖のさきになんてんに似た暗

緑の実をつけている。もって帰ろうとおもつて舟板のうえにのせておく。青い岩床の凹みに波がよせてはいあがるように遥はるかに白根しらねの山の峽に灰色の雲が打ちつけている。暮れてきたので実をとりあげて燈明に火をとます。心づよくもひとりこの島にすみながら妙みょうこう、高、黒姫、飯綱の山やまをつつむ恐しい雲のかなたに秋の日のうすれて落ちてゆくのをみればさすがにわりない里恋しさをおぼえる。

三十日

餅にもあきて飯をたく。うまくできたので浪華漬をだす。型のごとくがんじょうな桶の蓋には青肉で浪華漬とおした紙をはり、朱印のにじんであるのもいい。天王寺、六万体町、六万堂も気に入った。小刀で目ばりの紺紙を切つてすこし蓋をこじあける。と、ぷんと粕かすの匂いがする。そうつと粕をはいでみる。下のほうにすばらしい瓜うりの奴がうまそうに色づいて隠れている。奥にはまだなにかいる様子だったが楽しみにしてわざと見ずに瓜をだす。蓋のうえですこし切つて茶漬の菜にし、残りは大切に埋めておく。

夕。鳥居から帰つたら褐色のてんとう虫が机のうえをはっていた。

夜。雨。島のまわりを一本足のものが跳んであるく音がする。なに鳥か闇のなかをひゆ

うひゅう飛びまわる。雨の音はなにがなしものなつかしい、恋人の霊のすぎゆく衣きぬずれの音のように。

十月一日

明けがたまでふつたとみえ土も落葉もしっとりぬれて、雲はそのままに残りながら雨はあがっていた。湖の島の朝あさなぎ風はたとしえなく静かである。森はしんしんとしずまりかえつておりおり杉の枯葉がこそりと落ちるばかり、幾億の木の葉のひとひらもそよぎはしない。

南の浜へおりて顔を洗い、米をとぐ。白根の山なみに淡黄の雲がみえてきようは晴かと思わせる。鍋をさげて坂をのぼる。家のうしろでなに鳥かきゆうきゆうと鳴く。火をおこしたところへ本陣が玉子をもってきてくれた。鐐つばのひろい笊ざるの底にまろびあういろいろな鶏の卵は私のために乏しい村の隅ずみから寄せ集めたものである。飯がふくじぶんまで話して本陣は帰った。

食後。島の脊をあるく。茱萸ぐみの枝が落ちていた。けき遊びにきた村の子がすてたのであろう。大きな鳥の羽根をひろう。鳥の落してゆく羽根は天からふった宝ものみたいに子供

心に嬉しかった。柔い羽根をひろうと家ではそれを羽箒はぼうきにしてひき茶をはきよせるのを私は自分が拾ったのだといって御褒美に数をきめて白を廻させてもらう。私はわざと白を躍らせてぱつと茶の粉をたたせるのがすきだった。すがすがしい薫りがする。しめやかな茶臼の音は今も耳にのこつて遠いとおい昔を偲しのばせる。これはかすかに紺色の光沢をおびて紹ろのように透いてみえる幅のひろい羽根だ。葉しおりにしようと思う。

南の浜には雑草のなかに小菊がさきみだれている。そして汀に立つただ一株の大木のほかにはいつも水をくんだり米をといだりするところに一本のみず木と柳が枝をまじえてるばかりでこれといった木もない。柳は水のうえへのりだして風の日にはなびき、雲のない日には影をうつす。その根もとには蘚せんたいの糸根かなにかいつぱいに紅く波に洗われ、渚には砂まじりの小石が綺麗にすいてみえる。そこで器を洗うと雑魚の群がよつてきて指をせせる。時にはまた蟹かにが鋏はさみをあげて這はいよるのを匙さじですくって水のなかへ投げてやるとそのまま深みへはい込んでしまう。ここは崖と森に北風をせかれて島のなかでいちばん暖い処である。春の野に似て和なごやかな南の岡は湖のあなたに波うち、そこにほとほと模様をおいた灌木、榛はんの木の小村へかよう小路、草を負うた馬や人のおるのもみえる。秋になると皆が草刈りにゆくときいたが、見ればところどころ綺麗に刈られて幾団にも刈草が積ま

れている。

夕。鳥居へおりる石段のなかほどまでいって立っていた。北風がひゅうひゅうと雨をうちつける。右ての小暗い葦のなかに笠がひとつうちよせられてるのでほかにもありはしないかと思わしてたら鷺が一羽あわただしくたつて北浦のほうへ飛んでいった。

夜。後ろの木立にきょうきょうと鷺の音がする。

二日

朝。鳥は山をこえる朝の光をみて さめよ さめよ さめよ と呼ぶ。呼ばれてさめるものはこの島に私ひとりである。そうしてさめて四周の清浄なことを思つて心から満足をおぼえる。潤葉樹の葉ごしに緑の光がさして切るような朝の気が音もなく流れてくる。崖をおりて浜へ出る。村の人たちはまだ起きたばかりであろう、湖にも岡にも影がみえない。

食後。棧橋へでる。斑尾の道を豆ほどの荷馬がゆき、杉窪を菅笠がのぼつてゆくのは蕎麦を刈るのであろう。そのわきには焦茶色の粟畑とみずみずしい黍畑がみえ、湖辺の稲田は煙るように光り、北の岡の雑木の緑に朱を織りませた漆までが手にとるようにな

る。妙高、黒姫も峰のほうはいつしか黄葉しはじめた。曳かれてゆく家畜のように列をなして黒姫から飯綱へかけ断続した朝の雲がゆく。水の底が遠くまで透けて日光につくられた金いろの網がぶわぶわとゆらぎ、根こぎにされた水草の芽が浮きもせず沈みもせずにゆらゆらと漂いあるく。

南の岡へゆこうとおもつて島をでる。——註。島には船がなかった。たまたまきた船にでもものつたのだろう。——池田さんへ寄つたらほかほか湯気のたつ箕みのそばでおばあさんが麦を蒸していた。ねせておいて醤油をつくるのだそうだ。秣まぐさ山やまへゆく道は灌木の岡にそうて蔭になり日向ひなたになりうねうねとうねつてゆく。人どおりのないのと岡がせまつてるので斑尾の道よりいっそう淋しい。たまにゆきあうお百姓たちも村の人ではあろうが見知らぬ顔ばかりである。とある山蔭で粗朶そだを背負つてくる娘さんに逢つた。十六、七の瘦せぎすで、まみえと目のあいだにほんのり上気して、色白の頬に汗がひとすじ流れていた。彼女は小鳥かなぞのようにおじけてちらりと見た眼を胸のへんにつけながらおすおすおすおすといつた。田の畦あぜや湖ぎわに枸杞くこもまじつて赤い実が沢山なつてるのをよくみればひとつひとつ木がちがう。

秣山——南の岡——は美しい岡である。まどろむように横よこたわつた草山のあちらこちらに

落葉したのや黄葉しかけた灌木が小松の緑にまじってるのがちようどいろいろの貴い毛皮をもった獣が自然に睦みあつて草をくつてるようにみえる。羊齒しだは枯れたが女郎花おみなえしはまだ咲きのこつている。うす紫の小鈴をつらねた花の名はなにか。松虫草のなかをゆくと虻の群が一斉に羽音をたてて飛びあがる。風がないので日は春のように暖い。萩はぎ、うるしがもみじして柏かしわの葉がてらてらと日を照りかえす。あらまし葉を落した山つつじの灰色の幹の群立ちも美しい。滑かな窪地をとおして帯のように雑木が繁つてるのは清水の流があるのだ。草のうえに横になつてうつとり眺めてると山やまの嶺に雲が自らに湧いてまた自らにきえてゆく。

三日

夜なかから嵐になつた。目をさましたら障子がはずれてるので起きて縄でからげた。枝の音、島の根を打つ波の音、吹き落された鳥のあわたましい鳴声がする。

白根風しらねおろしが強く吹く日には南の浜は水が濁るので北浦の水をくむ。

夕。一日吹きまくつた風がぼつたりやんだ。わずかに日がさして山も水もしずまりかえつている。と思うまに北風がごうごうと雨をさそつてきた。湖水に風脚がみえて日が恐し

く暮れてゆく。

四日

朝からしとと雨がふる。

午後。うたた寐の夢を板戸をたたく啄木鳥きつつきに呼びさまされた。目ざましに香煎をのむ。焚きつけがなくなつたので裏へいつて杉の葉をひろう。じつとり土についてるのを拾つて土間に投げ込むうちに山のようになつた。こうして独りくらしてることが身にしみて嬉しい。

夕。雨はやんだが晴れもしない。燈明をともしにゆく。葦の葉のひと葉もそよがず入江も淵ももの凄いほど淀んでいる。山には灰色の雲がきれぎれにまつわつて小揺ぎもしない。後ろの木の梢に啄木鳥が二羽もきて競つて叩くのをきくともなくききながら水の底を眺めてると葦の芽が水面へはなかなかとどきそうもないのに穂さきを天にむけ力をこめて突き出ようとしているのを、そんなひなたに日向がいかしいものかしらと思う。湖が光つて小波が立つてきた。汀がちよろめき、葦がゆれ、やがて木の葉が蝉はねの翅のようにふるえて鳴りはじめる。まつわつてた山の雲はいつとはなしにほどけて山をはなれて漂つてゆく。北浦には波がよ

せながら南の浦は魚の息さえみえるほど澄んでいる。鴨の群はまだか、鴛鴦はと思つて眺めてもそれらしい影もみえない。いつもの漁をする人が洲のさきから葦のなかを舟を曳いてきたのできいたら水のなかに立つたままふりかえつて山を見ながら

「いつも今ごろはもう妙高に雪がくるのですけれど　そうすればきますが　おととい貝をとりについたら琵琶が崎の入江に真鴨が十羽ほどと鴛鴦もいました」

という。それは南の岡の隣に琵琶の形に曲りでた岬にそうて蜥蜴の尾のように細く入りこんだ入江である。あのしずかな草山につつまれた入江に海のはてからわたつてきておのずからなる舟の形にむつみあう浮寝の鴛鴦よ、古の猶太の神は万物創造の終りにあたつてすべての色よい鳥の羽の残りをつづつて羽衣とし、蜜のような愛のいぶきにその胸をふくらませて汝らめおとづれの游牧者をこしらえたのであらう。

燈明をあげ、白根の山の雲を残りおしく眺めてかえる。

夜になると鷺が島のまわりを鳴きまわる。雨にも風にもならず、月もみえずにしんしんと不安の闇がふけてゆく。

終日氷のような西風がふく。山へ雪がきたかとおもって出てみたが雪も見えない。西風がふけば雲が吹きはらわれると本陣がいったけれどどこどころ青空もすき日に照された雲もみえながらおおかたは根づよくへばりついてなかなか剥はげそうにもない。ふと南の浦のほうを見たら一羽の鴨が白っぽい胸をみせて低く舞っていた。それをよく見ようとしてぼさのなかを汀づたいにゆこうとしたら足もとから小鴨が飛びたった。櫓なの実を四つひろう。三つは栗色に、一つは青くつやつやしている。とげのある猪口ちよくにはいったのと、二つの猪口なしと、まだ若い細いのと。どん栗を拾ったことがなにか嬉しい。

夕。燈明へゆく。寒い風が灰色の雲を吹いて日が傷ましく暮れてゆく。風が強かったのだったやの葉が生りの枝のまま落ちている。花のさいた杉の葉を石段でひろう。本陣が胡瓜きゅうの塩おしと菜のゆでたのもってきてくれたので鴨の話をしたら それは一つはよく舞う奴で 一つは水をくぐるのが得手なのだ といった。

夜。どん栗と杉の葉をならべて日記をつけてるとき南の浦にばさばさと水を打つ音がして鳥の群がおりたらしかった。月は遠じろく湖水を照しながらこの島へは森に遮られてわずかにきれぎれの光を投げるばかりである。大木の幹がすくすくと立って月の夜は闇よりもすさましい。

夢。ひとりの爺さんが右手に細いはけをもつて左手におとなしくとまつてる鳩の頸や肩のへんを鳩羽や紺色に染めてゆく。そうしておくとその色の羽根がはえてくるという。そばに桃色鸚哥いんこが木の枝に嘴くちばしをひっかけてぶらさがっていた。……

六日

南の浜の木のところへいつて日にあたる。空が晴れて豊かな日光は浜をあたたため、西風は崖と樹木にせかれて高く頭上をこえてゆく。この木は高さ四、五丈？ まばらな枝なげに櫛なげの葉に似た潤葉をつけて根もとになにかの古い根っこ二株と無惨に裂けた枯木の幹が横倒しに水につかっている。南の岡のうえをもちりもちりと浮いてゆく銀いろの雲に見とれるとき一羽の魚かわせみ狗かわせみが背なかを光らせながら　ぴつ　ぴつ　と飛んでいった。もし人が思うままに生れかわれるものならばあの岩壁の隠れがに美しい衣をきて心にくくも独りすむかわせみになりたいものである。秋はまわりの山の木が落葉するためか鳥はみなこの島をめがけてねぐらをもとめにくる。

幾日ぶりかの天気なのでありたけの器を運びおろして洗い、ためておいた洗濯をし、水をあびてかえる。そして自らきょうの勤勉をほめながら御褒美にすこし早く夕食の用意に

かかつて味噌汁をつくり、浪華漬をあける。こつとりつつんだ粕かすの底からぱくりと西瓜すいかの丸漬がでてきた。さもうまそうに太い皺しわがよつてずつくりと酒の気がしみてるのを蓋のうでほどよく切つて皿につける。汁も煮えた。いそいそとして飯をたべる。

棧橋。きようは岡の木も島の木もいっぱいに枝葉をひろげて日光をすい、鳥居も燈明もめずらしく新しい影を落している。湖畔の岡の東側によくやく蔭がひろがって晴れた日の太陽はひとしお名残なごりおしげにたゆたいつつ沈んでゆく。黒姫山は日輪の冢つかか、きえがてにする微光をみれば晴れの夕べもまたあわれである。柴舟しばふねも畑の農夫もみな帰つたのに秣山に草をくう美しい獣の群はよい草の香に酔いしれて穴に帰ろうともしない。

鳥のしわざか島の脊に小さな蜆しじみの殻がこぼれていた。四つながらみな仰むけに白い裏をみせてるのをなにとはなしにひとつひとつ裏がえしてみる。水色と泥色に染めわけられた波模様を手のひらにのせてみながら戻つて机のうえにならべておく。どん栗と貝殻と杉の花とで賑にぎやかになつた机に頬杖をついてぼんやりと魚狗かわせみのことを考えはじめた。

南風の強くふく日私は手桶をさげて北浦の水を汲みにいった。いつものようにじつと足もとをみつめて思いに沈みながらしずかに小暗い坂道をおりてゆく。大木の枝はいくえにも頭上を蔽うて空とぶ鳥もこの姿を見ないであろう。幾年となく散りつもつた木の葉はそ

のまま土になつて柔やわらかに爪先をうずめ、踵かかとは餌をねらう獣のそれのようにすこしの音もたてない。崖の樹木は水をすう化鳥の形に押し合つて青暗い淵のうえに頸をのぼしている。ふと見れば汀からのりだした朴ほおの木の枝にひとりの女が腰をかけて一心に釣つりをしている。翠みどりの髪を肩になびけ、瑠璃るりの翼を背にたたみ、泛子うきをみつめる瞳はつぶらかに玉のごとく、ゆさりと垂れた左右の脛は珊瑚さんごを刻んだかとうたがう。みずはか、山姫か、奇しく妙たえなる姿は底なしの淵の底までも照している。私はおぼえずよろめいて手にした桶をとり落した。彼女は驚いて口笛のような叫び声をあげ浦づたいに島をまわつて竜宮の岬のほうへ飛んでいった。そのあとに私は温ぬくもつた朴の枝に頬をおしつけ恍惚として影もない水を眺めていた。夕べをもまたず冷えてゆく朴の枝が教えるであろう、無慈悲な鉤かぎに捕えられたのは淵にすむ鱒ますの子ではなくて私みずからであつたことを。

夜。鴨の声がしたかとおもつて空の光をたよりに浜へおりた。満月が無名樹のまばらな梢にかかつて湖畔の岡の裾に霧が幔幕まんまくのようにひいている。ただひとりこの月に照されて湖のはなれ島のわずかな浜べに波をへだてて草ばかりのかなたの岡を眺めてる心は涙といえど涙である。月界の神女は昔ラトモスの山の窟にまだうら若い恋人をいだいてさめることのない甘い眠りに入らせたという。私は今ひとりここに立つてこのように憧れてるの

に彼女はなぜはやくきて私を抱いてくれないのであろう。古い憧憬しょうけいの蓮華れんげは清らかな光にあつてふたたび花びらをひらいた。月天子よ、私は汝のやさしい面を仰いで夜をも明すであらう、姿は苦行の婆羅門ばらもんのごとく、心は渴仰の信徒のごとく。

夢。まつ暗な寒い杉の森のなかで北浦のほうを眺めて鴛鴦おしや鴨のくるのをまつている。やがて一羽の鴨が西のほうからさつとおろしてきて水につき入った。つづいて五羽も七羽もきてふくらんだ胸のへんにささ波をたてて矢のように進む。頸すじの真紅ひわのや、羆ひわ色なのや、見たこともない綺麗な鴨のなかに白鳥もまじっていた。

七日

夕。一の鳥居へ石段をおりるときふと柴しばく栗しほぐりの落ちてるのをみて 栗がなつたな と思つて上を見た。高い枝に雫しずくのたれそうな三つ栗がめつきりといえみわれている。胸を躍らせ枯枝を拾つて投げつけるうち手心をおぼえてうまくうちあてた。大きないががばかりともげてばらばらとこぼれるのをとんでいつて草のなかを捜してるとき落ちてきた枯れ毬いにいやというほど頭を打たれ なるほど と昔の智慧を思いだして羽織を頭からすつぽりかぶる。かた手に一杯ほどの栗を袂たもとに入れてきて机の上にあけてみたら虫の粉が美しくちらば

った。

焼山には雪がきたという。

八日

本陣が蛇のきもと蕎麦粉の饅頭をもってきてくれた。栗の話をしたら 島の西に大きな栗の木がある というので宮の後ろの崖をあとについておりてゆく。透きまもなく繁りあった雑木のなかに^{ひび}軋だらけの獰猛な腕をひろげた栗の木の姿はあっぱれ武者ぶりではあるがかんじんの栗は一つもない。

「去年はあぶなくて通れないほどなつてたが」といいながら心あたりの木から木へと捜しあっているも毬も落ちていないもので本陣は手もちぶさたな顔をして 南のほうに梨があるから と崖の腹をまわってゆく。私は栗のかわりにみちみち榎の実をひろう。本陣は 木曾のほうでは榎の実を豆にまぜて味噌をつくる とか 山奥へゆけば^{かや}榎、はしばみ、ぶなの実もたべる などと話しながら先にたつてゆく。南の崖に一株のけんぼ梨がある。これも「去年は降るほどなつた」そうだが高いところに七つ八つあるばかり。下草をかきわけてやつと三つ四つさがしだした。堅くて小さいがかおりは高い。ぐみ、^{みずひき}水引の花。

九日

朝なぎの浜におりる。山やまは雲の帳とほりをかかけ、湖辺の灌木はさながら乙女となつて朝の姿をうつし、梢にはなに鳥かきてまろらかな鄙歌ひなうたをうたう。
夕。栗を落す。

十日

北風がひゆうひゆうと雪雲をはこんで今夜のうちに湖水が氷りはせぬかと思われる。かんかん火をおこし栗をむいて栗飯をたく。肩をすぼめて森に吠える雪風の声をきいている。
夜半。思いがけぬ月の光がこうこうとさしこんだ。怪鷗よたかの声、波の音。

十一日

朝。小雨のなかを本陣が菜きしぶえと雉おおよぞる笛と大策おおよぞるに一杯のしめじをもつてきてくれた。本陣はくるたんびになにかしら山里らしい話を積んでくる。しめじはこのへんでいちばんいい茸きのこだということ、なに茸とかいつて傘の径が一尺もある気味の悪いのもたべるとということ

など。

ゆうべのうちに山へ雪がきた。妙高に三度ふれば里にもくるといいういたたえで村は今草刈りのおわり、とり入れのはじまりで大騒ぎだ という。十二日の秋祭——祭とは名ばかりでこれということもない。——までに草を刈りおえ、新そばをたべ、収穫をはじめて霜月のなかばまでに凡ての農事をしまい、それから人びとは身も心ものびのびとして思いおもいの温泉へゆく。

棧橋へ出る。山やまは寒そうな雲に埋もれて雪の色さえみえない。風に吹きさかれた霧のきれが目のまえの水のうえをそとせせてゆく。

木立ちの路を帰れば凍えた島のなかにあとりが鳴き、めじろもなく。

この住居のまえにある僅ばかりの平地のむこうは五、六丈？ の急な崖になつてその下が南の浜である。崖には杉の大木にまじつて象皮色の櫛の幹が枝をひろげ、瘤だらけのいたやば犀のように立ち、朽ちはたえのみはおおかた枝葉を落しつくして葛蘿にまかれています。暖い日には障子をあけてこれらの喬木のおのこどもの雄雄しい武者ぶりをみて心を樂します。我がちに日光を貪る木木の簇葉は美しい模様を織りだして自然の天幕となり、ところどころのすきまからはきれぎれの空がみえ、その小さな空を横ぎって銀いろの雲が

ゆく。そのなかでのやや大きな天幕の裂けめはこの家に天の光をもたらず唯一の路である。それゆえ私には朝は遅く明けて日は時のまに暮れてゆく。夜になれば無数の巨幹はさながら魑魅ちみとなつて人をおびやかす、星は簇葉をもれて冷たい木の実のようにみえる。

午後。晴。浜におりて茸を洗う。

夕。落栗をひろう。三つ四つ。妙高、黒姫、飯綱の嶺にさらさらと初雪がふつてきのうまで恐しげにみえた山の姿がなつかしやかになつた。なごりの雲が去りがてにたゆたっている。水の底にすいてみえる笙うえのなかへ小さな魚がしずかにくぐつてゆく。彼はただ一夜だけれどもこの島の岸べにかかる安住の宿を見いだした。

うちよせるささ波の音をききながら小島が崎の洲をあるく。ここは灌木にはさまれて狭間のようになつている。まわりの岡はかなり黄葉が深くなつた。あんなにたくさん鳴いた鶯はみんなどこへいったのかしら。そんなことを思いながらふと弓なりの枯枝をひろいあげて涙をうかめた。きようはいつになく遅くなつた。山も湖も暗くなり、鳥はみな島に帰つて木の頂にとまつている。

十二日

秋祭。朝本陣が迎いにきた。

斑尾の道をおるく。黍畑はいつまでも若わかしい緑色をしている。粟畑は濃い海老色になつてもまだ刈られない。きのう菅笠のみえたあたりは一段ほどの稲がふり干しにされている。足の疲れたところからひきかえして村へはいるときちようど托鉢の尼さんが読経をおえてある家の軒下からこちらへくるところだった。私はすれちがいながらなにげなく深い笠のうちをみた。染めたような豊かな頬や、読経のために充血した唇や、岩間を清水の流れゆく尼僧の境涯には涙なしには住めまいほどなまめいている。これからどこをまわるのか斑尾の道のほうへいった。

かねて招かれてた本陣のところへいつて鳥鍋で焼酎をのむ。本陣は少しばかりの焼酎に酔い猩猩みたいなになつて

「先生 もう舟がこげません」

という。で、一時ばかりそこらを歩いてもどつたらようよう色がさめたがまだ鼻をつまらせている。白根風が無二無三にふく。本陣は一所懸命艦を押しながら この風で鱒がとれるからいいのがあつたらもつてゆこう という。幾年もまえに山からくる清水の落ち口に彼らの最初の鱒をふつた鱒の子はその父となり母となるときがくると稚いころ乳房を含む

ことを知らぬその口にはじめて吸った清水の味を思いだしてわが子にもそれを吸わそうとおなじ葦べに寄ってくるのをさし網を沈めてとるのである。四方の山から岡から無数の鳥が島をめがけて帰ってくる。これから山の鳥は雪に追われてみなこの島に集るので鳥はいちめん鳥の糞になるが、春になって雪のとけたあとをみると木の実草の実の種子が敷きつめたようになつてるといふ。

夜になるとお宮のわきの坊主の木へ怪鷗よたかが二羽もきてぐわつぐわつと喉を鳴らしながら闇のなかを漁あさりまわる。

十三日

午後。雨のなかを浜へおり水をくんで枝豆をゆでる。木つつきは始終島を見まわつて人の影さえみれば咎とがめでもするように鳴きたてる。この美しい深山の彫師は日にち小さな鑿のみをふるつてまえの夜の夢を木の幹に刻もうとするかにみえる。

本陣が玉菜たまなと里芋さと芋としめじをもつてきた。うまそうな葉を十重とえはたえにかさねた玉菜と、毛むくじやらの里芋と、まだほけない面白い形の茸が笹のなかで転り合っている。本陣は

「また先生のお楽しみを拾ってきました」

といいながら恵比寿さまみたいな顔をして袂から柴栗を二、三十だした。またおかみさんのさとの味噌漬が三年めとかでよく漬いてるからといって茄子と大根の唾のでそうな色に漬いたのをくれた。私が湯をわかし、飯をかけ、漬物をきるあいだに本陣は玉菜をきざみ、浜へおりて茸と里芋を洗う。それから駄菓子で茶をのみながら越中越後にはほうぼうに尼寺があつて大勢の尼が托鉢にでる。このへんでも仏の忌日にでもあたられば読経をたのしんだりまた宿をかす家もある など話すうちに飯がふいたので

「どうもおごちそうさまで」

といつて帰つていった。あとにひとり王侯の富を得たきもちでほくほくしながら鯉節をかいてつゆをつくり、筧から玉菜と茸をとつて投げこむ。茸がひよくひよく煮えくりかえる。蓋でおさえつける。なかでことごとく音をききながらここを離れるのがいやだ と思う。

鼠が毎晩座頭虫の身だけをくつて足をそこらへちらけておく。箒がなくて掃けないのでたくさん溜った。座頭虫はくわれてもくわれても別の奴が相変らず長い脚をもてあましてよいよいみたい歩き廻る。

夢。夜なかごろ私はちようどこの島のように大木に蔽われた大山の頂に立っていた。月か星あかりかかすかに地べたが見える。おりる路はいくつかあるがそれが人里へでるというのでもない。私はそこに淋しいとも思わずに立っていた。そしてふと上を見たら枝から枝へ無数の熊蜂の巣がかかり数万の蜂が火のつきそうな翅を立てて盛んに蠟をぬっていた。

十四日

朝。飯をすましたところへ本陣がさも一大事らしく

「鱒がとれました 鱒がとれました」

と息せききつて四百めあまりのあめ鱒をさげてきた。とれたてで眼など生きてるようだ。腮えらから荒縄をとおされからすてんぐ烏天狗からすてんぐみたいな口をくわつとあけて鉤なりの歯を見せている。頭は焼物のように黒くてらつき、体は赤黒く光沢をおびて、美しいというよりは野趣のある魚である。切身にして味噌につける。

本陣は薪をとつてゆくといい崖に倒れた朽木を浜へ落してとんとんなた鉦で叩いている。午後。南が凧ないで日がほこほことあたってきた。北風のこないまに浜へおりて米をとぐ。柳の根もとにある穴から蟹かにが出てきて不思議そうに見てるのでそつと指をだしたら チカ

とはさんでそこそこに穴へ這い込んだ。米をとぎおわる頃にはもう風が立ってきた。洗濯をし、水をあびて帰る。

晩飯には鱒を煮てたべる。湖水の味がする。

棧橋。湖畔の平地だけを残してすっかり霧が包んでしまった。昼は稲を刈り夜なべには稲こきをする。と本陣がいったがもう暮れてきたのに田畑にはしきりに人の影がうごいてなにか堆く積まれた。鳥の群が鳴きたて鳴きたて後を追って帰ってくるのを眺めるとおりおり雲がきれて思いがけぬところに夕やけの空がみえたりする。はじめ四方の岡のうえに無数のほしがみえ、やがてそれが子ほうふり子ほうふりみたいに動きはじめ、次第に大きくなって鳥の形になり、黒い翼がみえ、声こゑがきこえて、それはみな島をめがけて帰ってくる鳥だということがわかる。鳥こそはまことに鳥族の農夫である。彼らはその強い嘴くちばしの鋤すきをもって終日耕うして倦むことをしらない。それゆえ彼らの衣は美しい紺黒に光り、健全な唄うたの声は野に山にひびきわたる。

一の鳥居をくぐったところに島でいちばん綺麗な杉の木がある。一抱えほどの幹と三抱えぐらいの根もとから二ふた又またになつて幹にも枝にも更紗模様をおいたように銭ぜに苔こけがはえ、どす黒い葉のなかにいちめんに花がさいている。その高い枝の下にみごとにかかつ

た大きな蜂の巢は毎日ここへくるときの一つの楽しみである。渦巻の浮彫をした甕形の王宮にはほうぼうに入口があり、暖い日には緋おどしの鎧をきた幾百の騎士が勇みたつて湖のかなたに笑顔をもつて彼らを待つ恋人の馨しい唇をすいにゆく。

十五日

帰る日がちかづいてからは毎朝目がさめるといしれぬ寂しさが湧いてくる。きようはお爺さんがひとり参詣にきて越後の国中頸城郡何村とかの者だと名のつてから

「あんたここにこうしておいでになつてなにか行でもなさるのですか、行をなさるには私どもがこうしてお話するのもお邪魔になるということですが」

といいながらそろそろと腰をおろした。私が

「いいえ行はやりません」

といつたらすしおちついて合点ゆかぬらしくひとの様子を見ながら 自分は今申すとおり越後の者でこの村の身うちへきのうから子供をつれて遊びにきて一晩泊つて今お詣りにきたのだがこれからまた子供をつれて帰ろうと思う なぞとひとりで話している。お爺さんはお宮へ燈明をあげてきたとみえ

「あぶないから消しておいで」

と子供にいいつけてまだ腑におちないらしく なにをなさる なにをなさる とくどく尋ねる。私は 都会に生れて都会に飽きたからこんなところに籠こもつたのだ といいかげんな返事をした。お爺さんはぱくりと口をあいてまわりの森や屋根裏を見まわしてたが

「やはり夜になればお話においでのこともごわしような」と変なことをいいだした。私がわかりかねた様子をしたもので

「いや昔からこういうところではてんご様や神様がきてお話しくださるといふことを承っておりますで」

という。私がまじめに

「もうこのせつではあまりそういうことはありません」

といったら感にたえぬらしく 仰ぎょう山さんにうなずいて

「天子様がおとめになりますかな」

といった。そうして孔あなのあくほどひとの顔を見たあげく

「どうも御失礼申しあげました」

と丁寧におじぎをして帰っていった。小さいとききいた伯母さんの話によると天狗様はお

りおりこんなことをして人をなぶりにくるといふ。まずはお気にさわるようなこともいわないでよかつたと思う。

きようもしぐれてきた。雲のように繁り合つた大杉の梢にしらしらと雨脚がみえる。夕飯の菜に鱒をやき、里芋と玉菜を煮る。

十六日

朝あさ島を出てゆく鳥の声によびさまされる。眼をあいたらぱちぱちと葉をうつしずくの音がした。

降りしきる時雨しぐれをききながら栗をむいて栗飯をたく。

夕。きようをかぎりもみじに雨の小やみのひまを棧橋へゆく。岡にも里にもたちこめた霧のたえまから濃い紅葉の色がみえて人たちは雨にもめげずこの遅くまで稲を刈っている。なごりおしくいつまでもいつまでも立ちつくす。

鳥もみんな帰つた。稲刈りの人も見えなくなつて霧がそのまま闇になつてゆく。きようは両方の燈明をともし、また棧橋に立つて水にうつる火影が「し」の字や「く」の字になるのを眺めている。

十七日

恐しい白根風がふく。朝早く本陣が荷造りにきて一つ一つ舟へ運びおろす。きようは風が強いから舟を小島が崎の入江につないできたという。鳥居のところへおり汀の杭につないだ舟にのつて後の掃除をしてる本陣を待つ。島の木は咆えに咆え、日光に溢れた雲が奔馬のように飛んでゆく。

舟をだす。讚むべきかな、島はもみじして鴛鴦のごとくにみえる。この島は国のはじめのころはたぶん一羽の鴛鴦だったのであろう。彼は禍津日の神の妬みにふれてただひとり恋人をうしない嘆きのあまりにかような島となつてしまった。それゆえ幾千年の後の世の今になつても秋がきてその子の子らがあの入江にわたつてくると恩愛のきずなにひかれて美しい昔の姿をあらわすのである。

岬をまわるやいなや大きな浪がつづけぎまにくるのを舟をかわしかわし湖畔についた。

青空文庫情報

底本：「犬 他一篇」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年2月18日第1刷発行

1990（平成2）年11月16日第12刷発行

底本の親本：「中勘助全集 第二巻」角川書店

1961（昭和36）年1月

初出：「犬 附島守」岩波書店

1924（大正13）年5月10日

入力：kompass

校正：酒井裕二

2016年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

島守 中勸助

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>